

地域経済ウォッチング

いわき民報 2012年8月22日(水曜日)

スポーツから復興を考える

—ドイツに見るスポーツの社会的統合機能—

豊かな生活のための余暇時間の充実 コミュニティの維持・発展を望む

東日本国際大学経済情報学部特任講師

岩村 聡

東日本大震災から一年半が経とうとしている。私は今年度から本校に勤務しているが、五年ほど前から非常勤講師として、週に一度、いわき市を訪れていた。そんな私の目には、震災前、直後、そして現在と、街の雰囲気が大きく異なって見える。震災前は空席の多かったスーパーひたちには多くの人々が乗車するようになり、道路では至る所で渋滞が見られる。また、夕方のスーパーでは会計を済ますためにかなりの時間待たなければならなくなった。こうした風景をみていると、震災直後と比べ、いわき市に人が戻り、そして多くの人々が移ってきたことを実感する。その理由の一つに、現在のいわき市は、避難者や復興の作業員として多くの人々がいわき市に居を移しているといったことが挙げられる。いわき市において震災復興を考える際には、こうした住民構造の変化にも触れておく必要がある。

さて、私の研究対象であるスポーツから、復興について考えてみたい。スポーツと聞くと、メディアで多く取り上げられていた、スポーツ施設の地震被害や放射能影響による屋外での活動制限などをまず想像するだろう。実際、いわき市でも、学校体育施設の多くが直接的被害を受けたり、被災者用の駐車場となっていたために使用が出来なかったりしたことに加え、復旧後も、子供たちが楽しみにしていた運動会は体育館の中で行われていたとも聞いている。

しかしここでは、そうした物理的な復旧ではなく、人々が今後も豊かに生活し続けるための復興について述べる。

スポーツは、言葉を交わさなくても、意思の疎通をし交流できる機能を持ち、性別、年齢、国籍、言葉などの壁を超える。例えば、ドイツには、住民自身によって運営されている総合型地域スポーツクラブが数多く存在している。それらのクラブでは、地元の人々だけではなく、言葉や文化背景の異なる移民も積極的に運営・活動に参加し、人口構造の変化するコミュニティを維持させている。このような例は、避難者や作業員などが流入し、かつてないほど急速に住民の構造が変化している、現在のいわき市においても、一つのヒントとなりうるのではない。急激な人口の流入による住民の構造の変化は、コミュニティに属さない(属すことのできない)人を多く生みだし、街の雰囲気を変えているようにも思う。今こそ、ドイツの例に見るような、スポーツの社会的統合機能によって人々が交流し、コミュニティを維持・発展させることが望まれる。

復興というと衣食住の確保や地元経済の復興を思い浮かべる。もちろん、衣食住を確保することは生きるために最低限維持しなければいけないものであるし、その後の経済的な復興はそこで人々が生活するために取り組まなければいけない課題のひとつである。しかし、今後継続的に人々が生活しつづけるためには、それだけでは十分ではない。豊かな生活を過ごすためにはスポーツなどを通じて余暇時間をより良くすることが重要である。人生を 80 年とすると私たちは 30 万時間の自由時間を持つ。この時間を豊かにすることが重要である。私たちは生活をするためだけに生きているわけではなく、余暇時間を自分の楽しみのために過ごし、家族や仲間と有意義に過ごすことによって生きがいを得るのである。

経済の復興と文化の復興は両輪である。経済が復興しなければ人がそこに居続けることはできないが、文化の復興なくしても人が居続けることはないのである。研究者としていわき市の復興の一役を担っていきたい。